

軍 事 史 学

第 56 卷 第 2 号

卷 頭 言

革命という内戦、革命という暴力 鈴木直志

西洋近世史を専攻する私は、大学の授業を通じて、学生のフランス革命観に接することがしばしばある。それはおおむね次のようなものである。フランスの王侯貴族は民衆を搾取する一方で、自分たちは好き勝手な生活をして、無為無策な政治に明け暮れた。そうした悪しき体制を倒し、民衆（人民／市民）が主体となる新しい社会を打ち立てたのがフランス革命である、と。おそらくこのような革命の見方は、大学生のみならず、わが国では広く一般に共有されていることであろう。しかしこの理解には、ある重大な欠如がある。革命が内戦の側面を持つこと、国内「戦争」であることが見失われているのである。わが国には対外「戦争」に対する激しいアレルギーがあるが、不思議なことに革命という「戦争」にはほとんど抵抗がない。それどころか、革命期だけで少なくとも六〇万以上もの人々が落命したといわれるフランス革命については、上記のような屈託ない肯定的評価がずっと保たれたままなのである。これは明らかにダブルスタンダードというべきであろう。社会正義のため、自由や平等のためなら武力行使も人的犠牲も許される、というのであれば、同じ理念で戦われる対外戦争もまた許されねばならない。逆に戦争をすべて拒否するならば、革命も否定されねばならないし、つねにその悲惨のみが強調されねばならない。武力行使の主体が国家だと絶対悪で、民衆なら絶対善という二重基準に、われわれはもう少し自覚的になるべきではあるまいか。

重要なのはこのことだけではない。もう一つ、二重基準の指摘を受け、従来に通念を崩された時の学生の反応が注目されるのである。すなわちそこには、近年の思潮の全般的特徴ともいうべき二つの考え方——物理的力の行使を何もかも（その正当性を一切顧慮することなく）「暴力」と呼ぶ傾向、そして生命至上主義——の下で、対象を把握しようとする動きが強く見られるのである。かくしてフランス革命は「王侯貴族をはじめとする『尊い命』を悲惨な死に追いやった巨大な暴力行為」として理解されるに至る。

革命の肯定的評価は、主として戦後の昭和に活躍した知識人の所産である。彼らは祖国の真の近代化のために革命を切望し、思考した。しかし時代が令和となり、近代化という課題もぼやけてしまった今、彼らが準拠していた思考の枠組み自体が、大きく揺らいでいるようである。